

沙流川、鶴川の中・下流域における自然と産業

I. 巡査趣旨と実施状況

日高地方西部の沙流川および胆振地方と日高地方の境界に位置する鶴川の中・下流域は豊かな谷底平野が開け、海岸沿岸部では軽種馬、内陸部では稻作・畑作が中心の農業地帯である。近年、二風谷のダム建設あるいは日高自動車道の建設着手などで、これらの地域は胆振地方や道央とのより強い結びつきが期待されている。

巡査では、これらの二河川の流域において、メロン栽培（穂別町）、二風谷ダム・アイヌ文化資料館（平取町二風谷）、軽種馬農家（門別町）の実地見学を中心に、巡査地域の自然と近年の産業の変化を見ていくことを目的とした。巡査は貸切バスを使用して行われ、途中の巡査経路である、広島町西の里地区の宅地化、北広島工業団地、長沼町・由仁町の稻作地域、夕張市紅葉山付近のメロン栽培などについても車窓見学で視察した。参加者35名を得、好天にも恵まれ、参加者の活発な討議が行われた。巡査コースと案内者およびおもな分担は以下のとおりである。

(1)コース

大谷地バスターミナル（午前9時00分出発）－国道274号－長沼町－由仁町－夕張市滝ノ上－夕張市紅葉山－道道74号－穂別町メロン栽培農家－穂別町市街（昼食）－富内－道道131号－幌毛志－国道237号－額平－二風谷（ダム、アイヌ文化資料館）－平取町市街－門別町軽種馬農家－鶴川町市街－苫小牧東部－苫小牧東部工業基地－道央自動車道－大谷地バスターミナル（16：55帰着、解散）

(2)案内者および分担

進藤賢一（札幌大学）：札幌都市化拡大に伴う移転牧場（馬追丘陵）、夕張メロン産地の概況、穂別町のIKメロンと農場見学、平取町・門別町の稻作と軟白葱、アラブ種軽種馬の複合経営、平取町の博物館・二風谷ダムの見学

大内 定（北海道教育大学札幌校）：野幌丘陵・馬追丘陵・夕張山地の地質、沙流川流域・鶴川流域の河岸段丘地形、穂別町のクビナガリュウ発掘と穂別町立博物館、二風谷ダムの建設と平取町の地

域開発との関連、平取町の産業

菊地正義（札幌稲北高校）：日高地方と平取町・門別町の軽種馬産の形成と発展過程および馬産に関する特殊な生産関係（仔分け馬、シンジケート、庭先販売など）

山内正明（藤女子高校）：厚別副都心後背の新興住宅団地、広島町西の里地区の宅地化、北広島工業団地、二風谷地区のアイヌ文化

II. 巡査地域の自然

1. 沙流川および鶴川流域の河岸段丘地形

鶴川は日高山脈西縁から太平洋に上川地方、胆振地方を流下する一級河川で、流路延長135km、流域面積1,270km²。穂別市街で穂別川、上流部で双珠別川、トマム川が占冠中央で合流し、占冠盆地、福山に小盆地、穂別から下流へ谷底平野が大きく開け、盆地や谷底内には数段の河岸段丘、また海岸では海岸段丘が2～3段発達する。

また、沙流川は鶴川に東に沿って流れ、日高山脈北部熊見山（1,175m）を水源に太平洋に注ぐ1級河川で、流路延長103.8km、流域面積1,337.2km²。支流は左岸川に多く、上流からウェンザル川、パンケヌシ川、千呂露川、額平川、右岸では仁世宇川がある。日高町・平取町の間の三岩に大きな先行谷をなす峡谷があり、これより下流で岩知志、振内の小盆地状の谷底があり、幌毛志から下流へ大きな谷底が開け、やはり上流域を除きて河岸段丘、海岸部では海岸段丘の発達が良好である。鶴川と比べると全体に河川勾配が急で、鶴川のおだやかな流れに対して、沙流川は昔から暴れ川と言われ、洪水の記録、被害が鶴川と比べて大きい。

日高地方の段丘地形を分類すると、8段丘面が数えられ、鶴川・沙流川流域では段丘面は高位のものからI～VIII面に分類される。海岸に平行する段丘崖をもつ幅広い段丘面でIV面より高位の段丘は堆積物の様相から海岸段丘と考えられる。またIV面に相当する河岸段丘は海岸近くにわずかな痕跡が残るのみで、V面以下、若い低位の段丘は

ど段丘面の保存状態が良く、下流域では諸所に連続的発達し、中・上流では小盆地底に部分的に発達する。

段丘面縦断投影図では中流から上流にかけて現河床の遷移点がみられ、沙流川では三岩付近の大きな遷移点、鶴川では規模は小さいもの的小刻みに数多くの遷移点がみられる。段丘面で遷移点の反映が判別されるのはVI面以下の段丘で、一般に遷急点直上（峡谷に入るところ）付近で段丘体積物が薄く、遷急点下流の盆地状谷底で厚い傾向がある。これは遷急点下流で扇状地形成状に堆積物が流れ込んだものと考えられ、とくに後述の扇状地形成期と関係し、最終氷期末の物質供給の多さとも関連する。

段丘形成時期は、支笏降下軽石（Spfa、現在、約4万年前と年代測定）、恵庭降下軽石（En-a, En-b）、樽前降下軽石（Ta-dなど）の段丘面被覆状況などから、I～III面は間氷期（W/R期）以前、IV面が間氷期（W/R期）、V面以下は最終氷期になり、V面はこの亜間氷期以前、VI面がこれ以降、支笏降下軽石（Spfa）堆積後の約3万年、VII面は恵庭b降下軽石直前の約2万年、VIII面は最終氷期が終わる頃、約1万年と推定され、最終氷期の段丘面と前後あるいはオーバーラップして3期の山麓緩斜面の発達時期が認められる。

なお、最終氷期のV面、VI面の下流域（河口からほぼ30～40kmの範囲）には、海面高度低下時に対応して現河床と急交配で交叉する段丘面の交叉現象が認められる。

2. 穂別町の地質と穂別クビナガリュウの発見・

復元

(1) 穂別町の地質

かつて穂別炭鉱、大和炭鉱（いずれも1965年頃に閉山）があった鶴川右岸支流の穂別川流域は、かつての赤平・歌志内・上砂川産炭地帯の空知山塊、美唄・三笠（幾春別を含む）・夕張産炭地帯の夕張山塊の南部に位置する。地質的にもこれら北部地域からの連続性があり、上部の頁岩、泥岩・砂岩質の新第三紀層（軽舞層、川端層、滝ノ上層など）、中部の産炭層である幌内層群・石狩層群（いずれも古第三紀・始新世）とその下部に白亜紀層（前期で穂別層、清風山層）が分布しており、褶

曲構造が発達している。しかし褶曲の度合は北側の夕張山塊に比べるとやや低くなり、穂別川流域においても上流の北部から下流の南部にかけて褶曲の程度が弱くなる傾向がある。しかし、過褶曲による重畠や衝上断層が諸所にみられ、夕張山地の褶曲の著しさを物語っている。

夕張山地の白亜紀層で化石が産するのは、幾春別川上流の桂沢湖周辺と穂別川上流が著名で、穂別でも古くからアンモナイトなどの化石が発掘されていた。

(2) クビナガリュウ化石の発見

発見者はアマチュアの化石収集愛好家の荒木新太郎氏で、1975年6月、穂別川上流の左岸支流のサヌシュペ川に入って骨が數本貼りついた化石ノジュールを見つけたのに始まる。1976年9月、苫小牧市青少年センター指導員・佐藤昌人氏が穂別川の化石研究のおりに荒木氏宅に立ち寄り、この化石を見て白亜紀の爬虫類の化石であることを確信し、国立博物館・長谷川善和主任へ鑑定を依頼した。

(3) 鑑定

長谷川善和博士から「まず、クビナガリュウ（*Order Plesiosauria*）のヒレ足の一部だと思います」という返事がとどき、北海道では初めての白亜紀の海棲クビナガリュウ化石の発見として新聞にも大きく報じられた。

(4) 発掘作業と復元

穂別町教育委員会では化石の重要性から、残る化石の発掘と復元を決定し、町も展示のための資料館建設も構想した。発掘作業は北海道開拓記念館に依頼され、1977年7月5日から4日間行われ、得られた化石はクビナガリュウの化石を含むもの55個、アンモナイトの化石25個、イノセラムス化石10個であった。発掘作業の総括での結論は、化石包含層上部蝦夷層群で、①化石はプレシオサウルスやエラスモサウルスなどに近い海棲爬虫類の胴からヒレ足までの部分、②アンモナイト、イノセラムスと一緒に産出したことから、中生代のもの、③胃石が発見されたこと、④大きなオールのようなヒレ足でこれを動かすのに十分な胸骨とヒレ足基部が確認された、などである。

発掘された化石のジュールから化石骨を取り出すクリーニング作業は地元の郷土資料館で行なう

ことになり、開拓記念館・赤松学芸員の指導で地元の都田哲氏が当たり、1978年5月から約3年半を費やし1981年12月にクビナガリュウの化石骨が姿を現したのである。

この間、展示資料館として穂別町立博物館構想が進められ、穂別町開基70周年の記念事業として、工事費2億円、規模1,100m²、鉄筋平屋建ての館内にクビナガリュウの全骨格復元と関連の地質、生物進化、合わせて郷土の開拓の足跡の資料を展示する事業内容が町議会で決定された。未発掘の頭、首、胴体後部から尾の部分の復元のため、化石骨とともにさらに詳しい鑑定と復元の作業が京都大学・亀井節夫博士に依頼され、作業は同大学の大学院生であった仲谷英夫氏が当たることになり、1983年から約3年の歳月をかけて全世界のクビナガリュウ類の骨格と比較検討し、「長頸龍亞目」の「プレシオサウルス上科」の「エラスモサウルス科」に属し、中型で全長8m、ヒレ足が全長に比べてやや大きいことと鑑定し、全骨格と骨格から予想される筋肉と皮膚を被せた復元図とこれをもとに館内に展示する模型（レプリカ）が作成された。

1982年7月にオープンした博物館に、全長8mのクビナガリュウの骨格模型が同年12月19日に設置され、以来「ホッピー」という愛称で穂別クビナガリュウが親しまれている。穂別クビナガリュウの発見と復元は、穂別町における自然史教育にも好材料になり、博物館発行の教材がある。

（参考文献：「穂別町立博物館ガイドブック」、穂別町立博物館発行、1993年、村上隆著「よみがえるクビナガリュウ」、穂別町立博物館発行、1983年）

III. 巡検地域の産業

1. 札幌市東部地域および広島町西の里地区の変貌

(1) 札幌市東部地域

札幌市東部地域は厚別区上野幌地区および豊平区平岡地区に広がる1265haの地域で、厚別副都心の後背地として、札幌市が1974年に策定した開発基本計画で大規模宅地造成地域に指定したもので、民間デベロッパーが主導して開発を進める新しい試みであった。丸紅、東急、三井などの本州系大資本による宅地造成は都市計画道路、都市公

園、上下水道などの公共施設、整備も含めて計画のほぼ80%を終了している。

国道274号線はこの地域の北部を東西に縦断し、車窓からは左右にニュータウンの展開を確認できた。商業機能は副都心地区や地下鉄大谷地付近に集積しているため、国道沿線には日用買い物品を供給する小規模な小売り商店や飲食店が立地している程度である。

やがて広島町との境界になる野津幌川の侵食谷とJR千歳線を跨ぐ立花橋を渡ると、1987年に開校した札幌日大高校が見えてくる。この周辺でも虹ヶ丘区画整理事業が進行中で、大型ダンプが行きかい、数台の重機が支笏軽石流の丘陵を切り崩し、宅地造成を行っている。

立花橋周辺は明治中期に江別街道や広島街道が開通し、ここがその結節点となり、馬追の休憩所として飲食店や雑貨店が10店ほど立地していた。ススキノの芸妓「立花」が出店し、駅逓の機能も果たしていたところで、橋名にその名残を留めている。

(2) 西の里地区

西の里地区は1974年から住宅供給公社による住宅団地の造成が行われ、第一、第二団地合わせて個数は約700戸である。広島町は北広島団地を中心とした市街地と大曲地区、西の里地区の3つの核を形成しているが、近年は大曲地区的住宅の建設が著しく、西の里地区はやや停滞している。

周辺にはまだ純農村の景観も残っており、樺山には農水省種苗管理センター北海道中央農場（馬鈴薯原々種農場）もあり、花卉生産など都市型農業の展開も見られる。

また農地周辺の沢地などでは建築廃材や産業廃棄物の埋め立てが行われ、西の里地区だけで15か所、50haほどあり、バブル期その数は増加した。民間の産業廃棄物処理場は3か所あり、札幌都市圏から大量に排出されるゴミ処理に地域住民からの不満の声も大きい。

1988年には広島町も加わり、JR北海道、ANA、NEC、清水建設などからの出資で第3セクターを構成して進める「ノーザンワールド構想」の計画概要が発表された。西の里地区の480ha（うち380haは国有林）を開発対象地域に、JR千歳線に新駅を設置し、森林資源の活用を目指す北方型

レジャー基地としてリゾートホテルや大型屋内レジャーランドなどを建設する、総事業費400億円の計画であった。しかし、バブル経済の崩壊によって計画はすっかり頓挫し、見通しはまったく立っていない。

(2) 北広島工業団地

西の里地区の東縁には広島第一、第二工業団地がそれぞれ1969年、1973年に造成され、現在約50社が操業している。工業出荷額は広島町の約50%を占め、金属、建設用機械、輸送用機会などの都市型工業の比率が高い。しかし、近年は大曲地区への工場立地が多く、その地位は相対的に低下している。

1996年には「北広島市」として市制施行が決定しており、札幌のベッドタウンとしての性格を強め、札幌経済圏との結びつきが一層強まっていく中で、西の里地区も変貌を遂げている。

2. 穂別町のメロン栽培

穂別町のメロンといえば、かつてIKメロンと呼ばれ、開発者・小林勇氏のイニシャルを冠したブランドであったが、「1k」gメロンと読まれ評判がよくなかった。小林氏はすでに穂別町メロン生産組合をやめていることもあり、現在では「夕張メロン」、「追分メロン」と同様、町の名を冠して「穂別メロン」とブランド名を変更したのである。「夕張キング2世」とも呼ばれる「穂別メロン」は改良品種で、夕張種よりやや日持ちが長く、糖度が高い。表面のネット模様、果肉の色、芳香、球形はよく似ている。

穂別町の農業は、全道的にみて規模が小さい。耕地面積は平均5.7ha、うち水田は4haである。したがって、小規模でも高収益のある野菜を有機質肥料栽培で行う、といった特化した農業経営を方針に農業の活性化を目指している。おもな野菜はメロン、カボチャ、ホウレンソウである。

メロンは2~8月のハウス、カボチャは6~10月の露地、ホウレンソウは年4回のハウス栽培である。メロン栽培農家は92戸、1戸当たりでは6.5m×100mの広さのハウス、7~8棟が栽培限度ある。町全体で100haを目標にしているが、現在80haの野菜ハウスを有している。1戸平均の粗収益は600~700万円で、これは夕張のほぼ半分である。

多くの農家は米の生産調整でメロン栽培を始め、水田との複合経営でメロンに取り組んだ。

出荷先は、札幌を中心とする道内向けであるが、夕張、追分産（果肉が少々硬いが、栽培面積としては穂別町とほぼ同じ）のものと競合し、市場に対する知名度も後発組みのため価格面で叩かれるケースがある。

野菜の有機栽培は、当初、町内のパーク、鶏糞を利用していたが今日では早来町などから買い付けている。有機農業農家を30%台まで増やす計画である。

3. 平取町の産業

(1) 人口の動態

平取町は日高山脈西斜面の内陸部、沙流川流域にあって面積748km²、面積の83%が山林（国有林63352ha、町有林41776ha、民有林18127ha、1993年）と山勝ちであるが、沙流川中下流およびその左岸支流の額平川に河岸段丘を伴って谷底平野が開け、耕地面積は4500haに達する。

人口は1965年の12930人以来徐々に減少し、1993年末で7049人であるが、近年はさらに少子化傾向で子供の数は減っている。現在のところ生産年齢人口は漸減にとどまっている。なお、人口の約40%に当たる2800人のアイヌ系の人々が暮らしている。

(2) 基幹産業としての農業

町の産業は、戦前から戦後の一時期は沙流川の送流（筏流し）を利用して林業が盛んであったが輸入外材に押され衰退の一途をたどっている。また、かつてわが国最大のクローム鉱山は、1916（大正6）年に試掘されて以来、一時期（戦時中）は国内生産量の6割、年産2万tに達したが、戦後はフィリピン鉱に押され、鉱床資源の枯渇もあって1955年から閉山が相次ぎ、1960年の新日東鉱山の閉山で大規模な鉱山はなくなった。

産業別就業人口をみると、第1次産業・第2次産業が減少し、第3次産業が増えてはいるものの、町の主幹産業は農業であることは戦前から変わっていない。戦後、1960年代以降の農業人口流出により、1971年に過疎地域振興計画が策定され、農業ではかつての米の単作、牛馬の牧畜、豆類などの雑穀といった分類から、減反政策も相俟って農

業の多角化と近代化を図り、畑作と畜産の振興により耕地面積も増加している。畑作では野菜（トマト、キュウリ、長芋、アスパラ、ごぼう）の生産が伸び、畜産では肉用和牛の生産の伸びが著しい。畑作は土地条件から米の生産性が良いことで、減反も1990年以降止まがかかっている。

近年の農業経営状況をみると、農家人口は1800人程度と落ち着いており、1992年現在では専業農家が43%，第一種兼業農家を合わせると65%を超え、生産農業所得も単位面積当、1戸当、1人当のいずれも漸増で落ち込んではない。しかし平取町でも農業の後継者問題を抱えており、町では魅力ある農業の振興に力を注ぎ都会からのUターン組みに期待している。最も力を注いでいるものが野菜生産と肉用和牛の生産である。

(3)野菜生産

1985年、農業振興基金制度により野菜生産団地を育成し、トマト、キュウリ、長芋などの生鮮野菜をハウス栽培（早出し）、露地栽培（夏期）で出荷している。とくにトマトは「桃太郎」種の完熟トマトで、1993年にトマト集出荷施設が完成してから出荷量が増大し、40%が札幌、残り60%が道外の関東・関西方面へ出荷される。品質が良い（甘味）ので競争力が強く、最近の札幌市場では生食用トマトの3割近くが平取産で、平取町のトマトの生産動向が市場価格にかなり影響するという。全農家の約5分の1に当たる111戸の農家がトマト栽培を行い、ハウス面積は50haに達する。

1月末にハウスで苗床作りが始まり、5月に早出しトマトが出荷され、夏期の路地育成ものは8月一杯まで収穫される。完熟トマトの生食規格外品は、トマトジュースの原料になり、町内の工場で「ニシバ（アイヌ語で旦那の意）の恋人」のブランドで罐ジュース、ボトルで製品化されているが、原料供給が追いつかず町外にはあまり出回っていない。

このほか、キュウリ、ホウレンソウ、長芋、ゴボウ、カボチャ、マッシュルームなども有力產品である。メロンはまだ少生産で他の地域（夕張、穂別、追分など）との競合があり、技術的な浸透もまだあまり力を入れていないという。アスパラガスは減反政策以前から本格的に栽培され、1969年には「日本アスパラガス工場」が進出した

が、近年は生産が減少している。農業従事者の高齢化と無縁ではなく、収穫に手間がかかるためという。

(4)平取町の畜産

「平取和牛」として知られる肉用牛の生産は、1962年、島根県より黒牛和牛の種牛を導入したのに始まる。1973年に平取畜産公社を設立してから本格的な和牛肉牛生産に入り、近年でも飼養頭数が年々増加し、1992年では74戸の農家が黒牛和牛2300頭を飼育し、農家1戸当31頭でかなり大規模である。近年、輸入牛肉の自由化により牛肉の価格が低下しているが、競争力の点では品質、とくに美味の点では輸入牛肉に断然勝り、あまり心配していないという。札幌には直販店（北6条西27丁目）があり、デパート（松坂屋、そごう、東急）でも販売されているほか、18店の焼肉店が平取和牛を使用しているとのことで、高級和牛として定着している。

馬の生産は明治初期にさかのばり、1878年ころ、アイヌ人平村ケネが馬30頭を飼い、「平村種」として品種改良を行い、耐久力のある役馬、軍馬として明治末ころは358戸の農家が1114頭を生産していた。戦後は1950年代に役馬から軽種馬に切り替わり、近年の状況ではほぼ一定の割合の農家で推移しており、現時点では34戸である。著名な競走馬としては「トウカイティオウ」が知られる。海岸部の馬産地帯より内陸にあり、夏期の高温、アブの害で条件はあまり良くないという。

酪農は、近年は農家数は漸減しているが、1戸当の飼養頭数は年々増加し（1992年で63頭）、経営規模は拡大している。

一方、養豚、養鶏は激減している。

(5)平取町の観光

平取町の観光事業の育成には2時期があり、1つは1971年、過疎地域緊急措置法の適用を受け、過疎地域振興計画の補助事業として、塵芥・し尿処理施設、養護学校、中央公民館老人福祉センター（びらとり温泉）の公共施設のほか、「二風谷ファミリーランド」の建設事業に着手したこと（1977年オープン）である。このころ額平川上流のスズラン群生地の保護・育成を行い、観光資源としてスズランは町花に指定されている。

2つめは、二風谷ダムの建設に伴う「レイクサ

「イドパーク構想」事業で、1984年に町が二風谷・平取ダム建設に同意し、翌年沙流川ダム地域振興基金制度の創設の一環として現在も進められている。これは、二風谷ダムの建設で開発局が行なう環境整備事業と一体化しているもので、町の施設すでに完成しているものに、町立二風谷アイヌ文化博物館、義経公園の整備と義経資料館（いずれも1992年完成）があり、二風谷ファミリーランドの施設拡張（オートキャンプ場、カーリング場など）も図られている。ダム建設環境整備事業で開発局がすでに建設しているものに、親水護岸公園、修景水路などがある。今後の建設予定として、チプサンケ（アイヌの船おろしの儀式場）の代替地としてのサーモンパーク建設（町・開発局）、地域物産センター（町）、二風谷ダム記念館（ダムとダム建設に伴う埋蔵文化財の資料保存・展示、開発局）などがある。

一方、二風谷アイヌ文化を保存し後世に伝える運動が古くからあり、萱野茂氏が財團を設立して建設した「シリムカ二風谷アイヌ資料館」（今年で創立30年）やアイヌ民芸があり、新しいレイクサイドパーク事業はどう調和させていくかが課題である。町では、他のあるアイヌ文化地域のようにアイヌを見世物的に売り出す観光はしないで、二風谷のアイヌ文化の保存に力を入れ、レイクサイドパークに調和したアイヌの歴史と生活を保存・展示していくことである。

(6)二風谷ダムの建設と地域開発

日高地方の河川総合開発事業としては、第2期北海道総合開発計画で新冠川、静内川、三石川、向別川の水系一貫型のダム開発（電源開発の意味も大きい）が知られるが、沙流川総合開発事業の大きい目的は開発局によると洪水調節にあり、二風谷ダム、これより上流左岸支流の額平川上流の平取ダムの建設により、例えば1981年夏の沙流川洪水のような水害はなくなるという。

開発局が強調している点は、本局係官からの聞き取りによると、計画自体、とくに二風谷ダムのダムサイト選定には苦小牧東部工業基地への工業用水確保との関連があるが、上記のように沙流川の治水事業としてダムの建設は早くから構想されており、また目的の71.5%は洪水調節のためであって、工業用水の需要の多寡でダム建設の意義

は左右されるものではなく絶対必要なものであること、また、二風谷のアイヌ集落の相当部分が水没するという印象を与える一部の報道は誤りで、水没するのは河川敷とこれに隣接する最低位河岸段丘部分で家屋では9戸と少なく二風谷の集落の多くの地域が水没するのではないこと、ダム建設事業に際しては二風谷アイヌ文化の保存に万全を尽くし、遺跡の発掘調査・保存、ダムを利用した環境整備事業にも力を入れており、参加者の方にも是非これらの点を理解いただきたいとのことであった。

平取町によると、水没地は民有地199ha、国有地369ha、このうち水田が60haで、水没地権者は153戸があり、このうち家屋9戸が含まれる。ダム建設構想の段階での二風谷集落全450戸のアンケート調査では、賛否両論があったが、大半は賛成であったという。現在、地権者二人（うち一人は萱野茂氏）が土地収用に応ぜず行政訴訟で係争中であるが、争点としてアイヌ民族の先住権を打ち出していることもあり、二風谷の人々も心情的には同調している面がうかがえ、複雑な面を覗かせている。

なお、二風谷ダムの建設と町の地域開発については上記の観光開発との関連で述べたが、工業用水取水に関して、苦小牧東部工業基地への導水路建設は北海道の事業になり、二風谷ダムの工業用水供給能力27万t／日のうち実際どのくらいの用水量を使用するか、道企業局で審議会を設けて審議中である。1997年には導水路建設に着手し、2001年には取水開始の計画という。開発局ではこの取水規模により、未着手の第2ダム・平取ダムの設計変更もあり得ることである。

4. 「優駿の古里」日高

(1)馬産の自然条件

日高地方で軽種馬（競走馬）を生産している農家は約1500戸、全国の軽種馬生産の約8割は日高地方が占める。

日高支庁のある浦河町の年平均気温は7.7℃、最暖月の平均気温は19.3℃、最寒月の平均気温は-3.1℃、年降水量は1182mm、積雪量30cm内外と全道的にみて温暖な地域である。海岸部は、5月から8月にかけて海霧の季節となり、農耕期間の日

照時間は少ないが、冬は晴天の日が続く。平坦地は泥炭地もあり、また海岸段丘が発達し、水利の条件が悪いため農業経営上、制約を受ける。

しかし、四季を通じて放牧が可能で、しかも石灰岩質に富む土壤のため良質の牧草が得られ、馬に必要な強靭な骨格が仔馬のうちからつくられる。

(2)軍馬からサラブレッドへ

封建時代、強い領主は早い機動力をもっていたが軍事上、あるいは運搬用として馬のもつ機動力は古くから重用されていた。北海道にはもともと馬はいなかったが、江戸時代の中ごろ初めて東北地方から南部和種が導入された。その後これらの馬が野生化して野馬となり、日高地方は多數の野馬の生息地として知られていた。1872（明治5）年に官営の新冠御料牧場を開設するとき、2262頭の野馬を集めたのである。

日清・日露両戦争で国産の馬が外国種に劣ることを知り、国産馬の品種改良が急務となり、強い軍馬を生産するために1907（明治40）年、浦河町西舎に日高種畜牧場が開設された。

この2つの牧場がきっかけとなり、戦前は軍馬を中心に生産が行われ、そのため種馬としてサラブレッドを輸入し、優れた血統の馬を育成する技術がこの地に残り、さらに生産者の努力が加わり、年々馬産農家が増えってきた。

戦後は競馬の振興に伴い、軽種馬の需要が増加し、大衆娯楽として競馬ファンが多くなった。レースの賞金アップ、好景気の持続など好条件がそろい、ますます軽種馬生産が盛んになり、日高地方の重要な産業としての地位が築かれたのである。

軽種馬は、アラブ系とサラブレッド系に分けられるが、日本では後者が中心である。中央競馬では、アラブ系は中止され、地方競馬にのみ限られている。サラブレッドは人間が創り出した技術と言われ、スピード、瞬発力に優れるため販売価格が高いことから繁殖牝馬の90%を占めている。

1960（昭和30）年以降、高度経済成長を反映して競馬ファンが急増、“競走馬であれば売れる”という売り手市場となり、この地方の農業経営の中核となっていました。

伝統的な農作物である米、雑穀、豆類、ジャガイモは高度経済成長期に価格低迷や市場不安で減

少した。米は1970（昭和45）年以降の生産調整、転作で魅力を失い、追い討ちをかけるように、定着しつつあった酪農も牛乳過剰生産問題を抱えるようになった。さらに、生産乳価格の低迷、生産費の上昇により酪農経営を圧迫した。肉牛や養鶏も輸入肉の自由化、飼料価格の高騰で伸び悩んでいる。

こうした農業政策および農業を取りまく環境の変化は、当時の軽種馬生産の好調の中でますます拍車がかかり、資金がなくても「仔分け馬」、「受託馬」制度を利用することによって軽種馬生産は発展していった。

(3)軽種馬生産の課題と未来像

軽種馬生産を取りまく問題として、

- a. 農業政策での位置付けが弱い。
- b. 競馬における輸入馬の拡大と外国産馬の出走制限が緩和。
- c. 生産過剰に加え、バブル経済がはじけて価格が下がり、売れ行き不振。
- d. 農業者以外の本州資本による大牧場の進出。
- e. 生産者自身の過大設備投資による累積赤字。

などが挙げられている。

こうした問題解決の方策として、1991（平成3）年に農水省家畜改良センター日高牧場（旧日高種畜牧場）跡地が日本中央競馬会と浦河町に払い下げられることになった。面積は、中央競馬会が約1441ha、町が約126haである。中央競馬会の計画によると、育成総合施設は、直線で1600mの砂馬場をもつ競走馬育成調教場（1993年オープン）、生産育成研究所、日高育成牧場の3ゾーンが中心で、これらの主要機能を1か所に集めた施設は全国で初めてで、1998（平成10）年に全面オープンの予定である。

また、浦河町は乗馬公園を含めた「優駿の里」計画事業を開始し、文字どおり馬にこだわった夢いっぱいの町づくりを進めている。

5. アラブ種の多い門別町（競走馬と米、軟白葱）

(1)競走馬種

門別町は、他の日高沿岸のサラブレッド地帯に比較してアラブ種が多い。門別町の馬産が全国の35%、日高の40%にも達しているのは、この町の農業経営が水田と軽種馬、畑作と軽種馬の複合経

當が高いことと関連している。アラブ種はサラブレッドとアラブの混血で、アラブ種の血が25%以上のアングロアラブが多い。アラブ種の導入は、1965（昭和40）年の競馬ブームから急増した。

(2)稻作

日高には、三石米、平取米、紋別米と呼ばれる銘柄がある。米種は「ゆきひかり」、「きらら」で、反収470～480kg（8俵）が平年作である。沙流川流域の沖積地が米にとって条件がよいが、7月の海霧（やませ）の発生が日照時間を減らす。米は1985（昭和60）年をピークに減少し、現在1400haを切っている。

(3)酪農

酪農家は1970（昭和45）年の400戸から20年間に92戸に激減、逆に飼養頭数は2倍の6000頭に増え、1戸当たり65頭規模になった。しかし、酪農専業農家は半数で、さらに規模は大きく、兼業の形態は軽種馬との複合、水田との複合が主流である。

(4)肉牛

肉牛農家は20戸（専業は5戸）、1戸平均130頭であるが、経営内容は多様である。仔取り（繁殖）、肥育、一貫経営などがあり、出荷までは18～20か月、体重600～650gがメドである。牛種では乳牛のオス黒毛和種である。農家は厚賀川沖積地に多い。兼業は水田との複合が一般的である。最近、ぬれ子の価格が下落し、400頭の専業農家の経営が行き詰まる例も出ている。

(5)軟白葱

最近野菜作りで急増しているのが軟白ネギ（軟らかい長葱）、ホウレンソウ、いちご、大根である。とくに、軟白ネギは出荷額1.3億円にのぼる。1戸平均1000万円の粗収入があるが、半分はハウス施設費などに当たられる。休耕田を利用して栽培している。沙流川、厚賀川の沖積地に多く、全量を農協に出荷する。北海道内の競合産地は富良野市山部である。

(6)競走馬の産地としての門別

門別は、日高地方の中でも競走馬の産地としては比較的歴史が浅い。千歳空港に近いため本州資本の進出も多いところである。1970（昭和45）年、軽種馬農家は370戸、飼育頭数は2350頭であった。

1戸平均6頭である。

その後飼育戸数は年々減少し、1990（平成2）

年には210戸になった。しかし、経営規模は確実に拡大している。1戸当たりの飼育頭数は、1980（昭和55）年に11頭、1990年には14頭である。門別町の農業粗生産額124億円の65%、畜産物の75%に当たる80億円が競走馬生産によって占められる。まさに競走馬の町といってよい。

(7)日高地方の馬産の近年の特徴

門別町を含む日高地方への競走馬生産の特化は、このところさらに進んでいる。繁殖牝馬、種雄馬、産駒頭数いずれも増加傾向である。競走馬生産と流通にまつわる諸産業も活発である。30億円産業の馬匹輸送、損害保険、200人を超える獣医師、飼料輸入と飼料生産資本の介入、トレーニングセンターや駒祭りの存在など、馬産に関する諸業は多様であり、地域経済の活性化に大きな役割を果たしている。